

人間関係と自己構造のイメージ

— その1. 理論と方法論 —

水島 恵一・草田 寿子

Structure of Self and Interpersonal Relationship

(1) Theory and Research Method

Keiichi Mizushima and Hisako Kusada

We have previously proposed the “Non-Euclid theory of self”, in which we have clarified the varieties of schema of self-perception. Especially we have focused our attention on the structurization of “common self” instead of ordinary “individual self.” In this paper, we have tried to establish the “two dimension theory” of self and interpersonal relationship and to make a scale for operational research.

In our scale using imagery and the “Schematic Projection” one dimension shows form of self, individual v.s common (horizontal axis of Table 2), and the other shows degree of growth (vertical axis). The scale is used for the image of self as well as two-persons' relationship. Also the scale includes various phases; attitudinal, emotional, existencial, etc. Immature or pathological form \ominus are found both in isolation (or individualistic) stage \textcircled{b} (e.g. autistic) and in the stage of communion \textcircled{f} (e.g. symbiotic), as well as in other inbetween stages. Specially mature and healthy form \oplus are found in each stage, which seems to clarify the “paradox of peak experience” as Maslow pointed out. Ordinary development from infant to adolescence is mainly from $f\ominus$ to $b\oplus$, whereas growth experience in T-group, encounter-group etc. is regarded as from $b\ominus$ to $f\oplus$. Also various forms of self are discussed.

1. はじめに

この一連の研究は、親子関係、友人関係、恋愛関係、師弟関係、教育・カウンセリング関係など、2者関係の構造とそこにおける自己構造をいくつかの次元（役割の次元、態度的次元、情緒的次元、深層感情の次元、存在感の次元など）でとらえようとするものである。とくに今回の報告では、構造をイメージ的にとらえ、内容的には、多くの人間関係に共通する孤独↔共同の情緒的態度的特性と個

我的存在感↔共同存在感の態様をとらえることをめざした。また、方法的には、社会的・心理的・存在的次元を統合した研究法を確立することをねらいとした。

この第1論文では、とりあえずの目的を自己像・関係像の理論の明確化と尺度構成にしぼる。それに基づいて、第2論文では、友人関係（対異性恋愛関係を含む）、親子関係について、情緒的態度的次元における孤立性↔共同性の実証研究を行ない、それが個的存在

感↔共同存在感とどのように関連するかに焦点をあてることにする。

自己・関係構造については、すでに多様な観点から各方面で研究がなされているが、本研究での視点は、われわれ独自の自己理論(水島 1978, ほか)に根拠をもち、存在感にかかわる多様な自己構造の可能性化を前提としている。ここではそれを一定のイメージの図式的視点から尺度化することにまず重点をおくわけであるが、もちろん人間学的には、自己・関係像の生きた姿は、現象的ニュアンスを含んで具体的に追求されるべきものであり、それによって理論も体験的裏づけをもつ。しかし、人間科学の方法における要素的アプローチ、構造的アプローチ、現象的アプローチの3相相補性(水島1979)を考慮にいれるとき、できるだけ少ない変数と単純な構造によって近似的な大枠を設定することが操作的実証研究との橋わたしに有利である。そのため大枠としての理論的・図式的尺度構成を行い、質問紙化および図式投影研究につなげながら、常に具体的現象記述・ケース研究と併せ考察することを念願とした。

2. 共同存在理論と一次元尺度構成

共同存在感が様々な形で育つことは、前記自己理論の中心課題であった。個人的自己のみを存在感の原点とする近代的常識に対して、前近代的存在様式、病者やある種の異文化のもとでみられる存在様式などはかなり違う。また成長体験、特殊な社会的体験、宗教体験などにおいても個を越えた存在様式が体験される。(また自己知覚や自己イメージの最近の研究結果も個人的自己の構造化が学習の諸産であり、相対的であることを示している。)我々の自己理論は、これらの経験的事実をふまえ、個人的自己像を絶対の単位とした「ユークリッド的」常識に対して、「非ユークリッド的」な自己構造・関係構造の原理を提案し、共同自己・没我等々が同じく構造原理として可能であることを示すものであった。とくに共同存在は、現存在分析や実存心理学に

もみられるように、個我中心の孤立性から開かれていく成長過程として近年再評価されており、Tグループ、エンカウンターグループなどでも評価されてきたものである。

日本においては、共同自己が伝統的に強いわけであるが、しかし、現代生活においてはやはり個我が中心になっていることに変わりはない。そして、近代個人主義社会における存在様式一般についていえば、他者・世界から断絶した独立個我のみを原点とする限り、個人の深層の問題に対しても、また個人と社会、人類の統合の問題に対しても解答が見出しにくい。むしろ我々が自己実現のあかつきに他者・世界に自然に開かれていく内的過程に着目するならば、そこに「ユークリッド的」常識をこえた可能性の世界が開かれる。

以上のように、自己超越や個と普遍の課題をも背景にもちながら、筆者は存在性に関するより抱括的理論を探索し続けてきたわけである。簡単にいえば、自己の存在感を規定するノエシ的側面は、「個」「集団」「普遍」等々の意識作用のすべてに共通するある働き(x)である。一方、ノエマ的にとらえられた「自己」は生活に応じてまったく多様であるが、そのノエマ的自己の形態によって、ノエシ的自己のとらえ方も規定されてくる。開かれた普遍的自己に目をあてていけば、その普遍的作用の顕現として、常識的、個的ノエマ自己を越えた共同存在、一体化、没我等の成長体験が可能になってくると考えられるわけである。

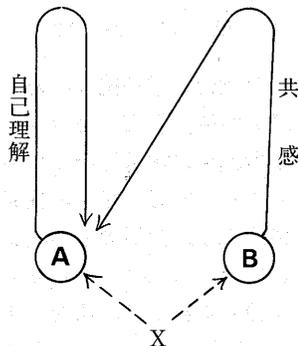


図1 普遍的な作用モデル

図1は5で述べる共感を例にとり、ノエシ的作用を線で示したものである。点線部分によって普遍的ノエシス、すなわち非ユークリッド的図式が成立し、Bの共感はAの自己理解と本質的には同じになる(5-g参照)。

以上のような、共同存在性に力点をおいた「非ユークリッド的 自己理論」は、本論の前提とはしていないが、しかし成熟した共同存在性の評価の基礎にはなっている。すなわち、内的成熟に伴って、個人的自己の枠が開かれ単に共同自己の枠におきかえられていくだけでなく、より本質的に普遍的ノエシスの働きとしての開かれた内的共同存在性が発現していくその過程に我々は研究の焦点をあててきた。そしてまた、このような共同存在性の成熟について、我々は体験学習的実験やその測定法の研究を積み重ねてきたわけである。

(水島1978, 水島・神田・他1981)。

これらの研究において我々は、普遍的ノエ

シスが個的ノエマの常識をこえて発現する度を①～⑧の7段階に評定して測定してきた。すなわち①孤立の極、②孤立、③孤立的連帯、④連帯、⑤一体的連帯、⑥一体化、⑦没我へという、つながり=成熟の7段階(当初5段階)である。そしてこの各段階について自己像、他者像、関係像、共感、協同行動、その他のいくつかの極面の分析を行い、尺度化を行ってきた。(表1参照、一部水島ほか1979)。その大部分は上杉(1978)、神田(1980)によって集団関係および2者関係の成熟尺度として質問紙化され、第2論文の質問紙の基礎となっている。(各段階を図式的に表現すると表1の最上段のようになる。)

(注)次項以下、本研究では普遍的ノエシスの仮説はとらず、a～gとくにb～fの5段階は単に個の枠が優先するか、共同の枠が優先するかという研究方針に転換しているので要注意。上記はあくまで1979年、日本心理学会発表当時の理論枠である。

表1 1次元スケールの諸相

	①孤立の極	②孤立	③孤立的連帯	④連帯	⑤一体的連帯	⑥一体化	⑦没我
Q10 知覚図	⊙ 自	⊙ ⊙	⊙ ⊙	⊙ ⊙	⊙ ⊙	⊙ ⊙	⊙ 他
Q3 大事なのは	自のみ	自のみ	自 > 他	自 ≧ 他	自 = 他	自 ≦ 他	他 < 自
・教育等のやりがい	なし	義務・役割として	役割・責任優位	役割・責任・他者の成長	主として他者の成長に役立つこと	他者の成長即自分の成長	他者の方がより「自己」
Q6 自己と他者は	無関係な存在	独立して存在し、役割上交渉	独立の存在その間、やや心も通い合う	それぞれ独立の存在心もつながる	心がつながり相手とのまとまり	自分と相手は一体である	相手の中に生きている
Q5 共感	共感なし	頭でわかるだけ	ときには心を感じる	自とは別の相手の心として感じる	ときには自分の心とも一緒になる	ぴったり一緒になって感じられる	ただ相手の心だけが感じられる
Q4 協同行動	協同行動はできない	義務としての協同行動	役割としていくらか親密に協同	親密な気持で協同行動	親密に協同ときには一心同体	一心同体で協同行動	ただ相手のために行動
他者のQ1 素晴らしい体験	関心ない自分とは無関係	関心あるが自分とは関係ない	かなり関心がある	自分の体験ではないがうれしい	自分のことのようにうれしい	彼の喜びの中に一体となる	彼の喜びそれ自体で十分
Q2 自分が死んだら	暗黒すべては無意味	相手は生き続けるが自分には無意味	相手が生き続けるのを漠然と感ずる	相手が生き続けるのをはっきりと感ずる	生き続ける相手に自分を託す	相手の中に生き続ける	相手が生き続ける事実だけで十分
Q8 自己とは	個人的存在だが実感なし	個人的存在のみ	個人的だがどこかで共同存在的	主に個人的だがかなり共同存在的	自己共同の系の方がより「自己」	合一した共同存在	他者の成長それ自体
・集団・社会関係	—	バラバラな集まり	個人主義的利益社会的	←→	集団主義的共同社会的	一体化集団	—

その他様にしてさまざまな側面・状況下の規定が可能

3. 自己の多様性理論と2次元尺度

以上の1次元尺度は、共同存在の方より価値をおくようなものであったが、しかしたとえば、共生関係や閉鎖的集団性にみられるように、共同自己が閉ざされているような場合と、自由で深いつながりのように共同自己が開かれている場合とでは基本的に違う。一方自己が個として分化した上でこそ成熟したつながりが可能だということは現代の常識でさえある。また孤立的個我において成熟した実存が論じられていることも周知のことである。このように孤立・個我の側 (Ⓐ側) にも、一体化・共同存在の側 (Ⓔ・Ⓕ側) にもプラスマイナス双方の面があることは、実は自己の多様性の理論からしても当然なわけである。前節の理論におけるように、社会的ないし宗教的共同存在体験を高次の成長体験として認めるとしても、(また普遍的ノエシス顕現の仮説にたつとしても) 現実に記述されている多くの体験は、より低次の閉鎖的集団性や共生関係を含んだものである。まして通常の特

ストで測定されたものは、成熟したものから未成熟・閉鎖的な種々のものを含んでいる。

そもそも尺度化を伴う理論は、over-simplificationをさけることができないのであるが、孤立から連帯・一体化へという関係性深化の一次元的単純化は、あまりにも単純すぎる。そこで、内的成熟・深化の軸と、個的(孤立的) ↔ 共同的(連帯・一体化)の軸とを2次元的に設定する道を我々は選び、孤(個) ↔ 共同の軸(表2のヨコ軸)については、まさに自己構造化の多様性理論に立脚することにした。すなわち、本来は個人的自己から共同自己にわたる、あらゆる段階がそれぞれに(生活条件に応じて)構造化の権利をもち、したがって理念的にはどの段階についても病理、未成熟な段階から成熟、極致体験までが存在する。これが別の成熟の軸として設定されるわけである。(表2タテ軸)。成熟の軸は通常自我強化、内面の充実等々の要因を総合してとらえられるものである。

なお、ここで前述した7段階図式スケール(表1最上段)をあてはめると、問題は次のよ

表 2

	Ⓐ 孤立の極	Ⓑ 孤 立	Ⓒ孤立的 連 帯	Ⓓ 連 帯	Ⓔ一体的 連 帯	Ⓕ 一 体 化	没 Ⓖ 我 (的共感)
⊖	⊖ 他者がはっきりみえていない。又は物、手段、障害、権威としてのみうつる。	⊖ ⊖ 他者は対象にすぎず、主体として認知されない、つながりの実感もない。	⊖ ⊖ (虚線)	⊖ ⊖ 他者は主體として認知されないが、自他のつながりがかなり感じられる。	⊖ ⊖ (虚線)	⊖ ⊖ 自他は未分化で一体に感じられ、個としての自分の実感も他者の実感もない。	
⊕	略						
⊕		⊕ ⊕ 他者は対象としても感じられ、主体としても感じられる。自他のつながりの実感はない。	略	⊕ ⊕ 他者は対象としても感じられ、主体としても感じられる。自他のつながりがかなり感じられる。	略	⊕ ⊕ 他者は対象としても感じられ、主体としても感じられる。それぞれが主体として感じられしかも自他は一体に感じられる。	
⊕	略						
⊕		⊕⊕ ⊕⊕ 現在・具体的関係はないが、他者を全き主体として尊重できる。	略	⊕⊕ ⊕⊕ 他者は全き主体としてはっきり感じられる。自他のつながりがかなり感じられる。	略	⊕⊕ ⊕⊕ それぞれが主供としてはっきり感じられる。しかも、自他は一体に感じられる。	⊕⊕ 他者自身のみが全き主体としてはっきり感じられる。(自分の存在感は明確だが問題にしていけない)

うに明確化される。前述した図式における「共同の枠」はまとめり、共有、交わり、つながり、開かれといった相互に密接に関係はしているがニュアンスの違う関係性概念を含んでいる。それらは横軸的なものもタテ軸的なものも含んでいる。これらがいずれも広い意味での共同自己の形成に関係していることはたしかであり、過去の我々の一次元図式は、これらを一括して未成熟な孤立から成熟した共同へという単純化を行ってきたものである。そこで分化した2次元尺度化のためには、第1に図式スケールの実際上の観点から閉鎖的共同性をも意味する共同枠による交わり（以下「まとめり」という）と内的充実と成熟にもとづく深層における交わり（以下「つながり」という）とを区別することが最低限必要になる。すなわち、核と枠を用いた図式的表現の性質からして枠的交わりと核的交わりとを区別し、核による「つながり」が充実するほど、枠による閉鎖的・共生的「まとめり」はいらなくなるという見方に立つわけである。このことは（図式的投影法による体験学習でいくらか実証されているが）、個人の自己像において核が充実するほど、枠のかたさや閉鎖性は不要になることと対応している。

4. 2次元尺度の操作的基準

以上の諸問題点をできるだけ総合的に考慮しながら、しかしある程度単純化した操作的枠組みを作るため、我々は次のように基準を設定した。（表2参照。従来の一次元的共同性成熟の尺度は、この表においては左上から右下、主としてa[⊖]、b[⊖]、c[⊕]、d[⊕]、e[⊕]、f[⊕]へという軸になる。）

①自己像が個人的自己から共同自己へと至るヨコ軸は従来通りとする。ただしこの軸に成長価値を含めないため⑥の「孤立」には「独立」としての意味を含め、①の「孤立の極」は特殊な場合を示す概念とする。「没我」も同じく別扱いとする。これら極外のものを含めた段階が前述した7段階である。（⑥を「孤立」でなく、「独立」と改訂することは

将来ありうるが、当面は従来との関連もあるのでここでは変更をさけた。）なお、この7段階（とくにb～fの5段階）において図式の共同の枠・まとめりが強い程、それに支えられて個の枠が不要になると規定できる。その逆もまた真であり、したがってあえて量的に言えば、個の枠と共同の枠の合計がほぼconstantになるように図式を設定することが便利である。ここで個のまとめりとは、個の一貫性、アイデンティティ、自我、個と外界を区別するもの（現象的個我）であり、これと対応して共同のまとめり（枠的交わり）は関係の一貫性、安定性、共同の機能を意味し、同時にその共同体を外界・第3者と区別することを意味する。

②上記と別の直交軸として成熟の軸を設け、それを内的つながりの充実の5段階で図示する。ヨコ軸右の「まとめり」すなわち共同自己の枠に対して「内的つながりの充実」とは自己の核における関係性、充実であると定義する。それはよりホンネの内面的な深層のつながりであり、他者を主体として感じとり、他者への信頼性、他者尊重、成熟した愛などを特徴とし、かつ枠のように外部と2人とを区別する閉鎖的境界がない。枠的つながりが現実に会いコミュニケーションしている交わりを前提としているのに対して、核的なものはイメージレベルや可能態としてのレベルでも成立するものとみなす（この意味からも次に述べるように個の内的充実とははっきり区別しにくいものである）。

なお、さらにタテ軸の成熟を、ヨコ軸の共同性と区別するため、未成熟な一体化に対する成熟したつながりの諸相を列挙するならば、閉鎖性に対する開放性、自己喪失に対する自己超越、閉鎖的愛に対する開かれた愛、盲目的一体感に対する「ありのままを見すえた一体感」、自己中心性に対する相手中心性等々のことがあげられる。また「孤独の不安や拒否」に対する「安定した孤独」、依存に対する広義の独立までもが含まれると考えられる。これらは最後に述べるように、実証ケース研究か

らのフィードバックによって我々がタテ軸の評定基準としてひろいあげてきた項目である。

(注) 当初我々は、核的つながりを核を結ぶ線で表現し、核の充実とは区別した案、つまり、核の充実、核的つながりに個の枠、共同の枠の4変数案を用いていた。この場合、成熟のタテ軸においては、個の充実が増すと同時に、内的つながりが増すことになる。(⊖から⊕-⊕と記号化される。) また共同性において、未成熟な段階では個の枠が共同の枠(枠的つながり⊖)におきかえられていくのに対して、成熟した段階では核的つながり(+=+, 二重接続記号)におきかえられることになる。しかしこれは複雑になりすぎるだけでなく、関係性をこえた個人の内面を、独立に設定しすぎてしまう。核的つながりは、個人の核の充実と密接な関係にあり、本研究でとらえようとするのは両者を含んだ意味での現象的関係性である。したがって核的つながりと核の充実の記号を統合し、それがすなわち内的関係性充実を表わすとしたわけである。この場合、図の右下(⊕+⊕)のような表現は、個の枠のないことと核の充実とによって、核的つながりの印象をもたせることができ、個の内面的充実もあくまで他者との関係性の深い充実という意味においてであることを(感覚的体験的にも)表現しようと考えられる。したがって(⊖)と(⊕+⊕)の差は、核的つながり(充実)の有無のみとなる。つまり、開かれた共同存在においても枠的つながりはあり、ただ核的つながりの充実にゆえに、枠が柔軟で変換がきくという解釈になる。したがって共同の枠とは、単なる現象的共同性を意味する。同様に、孤立の極における個の枠も現象的孤立性となる。

5. 孤立・個的存在性と、一体化・共同存在性の諸段階

以上のように、表2が新しい尺度の基本であるが、これによって従来規定してきた自己・関係性、価値の基準、共感、協同行動をどのように規定できるかを以下に吟味したい。

①の例外的「孤立の極」においては、自他が本来無関係であり、他者がはっきり見えていない。自閉的、無感心、極端に自己中心的で、他者が物、手段等々としてのみうつ。この①段階は基本的には病理としてのみ存在する特殊なものであり、ただ健康人や成熟した人でも、極端な孤立状況下では、この段階を示しうる。ふつうの人が日常自分にこだわっていて他者がみえない、あるいは他者を道具視しているような状態もここに位置づけられる。

②はまさに孤立性↔共同性の段階上の個的孤立的極である。ここでは⊖(タテ軸の非充実・未成熟)が主として孤立的、⊕(同充実・成熟段階)が主として独立的というニュアンスをもつ。⊖は相手をまったく拒否したり、そもそも人とのつながりの感覚がもてないような場合で通常の孤立のほか、①で述べた自閉性、自己完結性、自己中心性も含まれる。これに対して内面が充実してきたときの独立的孤立とは、たとえば自己の信念に生きるような孤独な実存の際に見られる。いまこの瞬間に交わりやつながりはないが、いつでもそれが可能な状態であり、孤独のまま個が安定しているとみなす。とくに②③では、現実の交わりはないが相手への関心が強く、相手を受け入れ、尊重し、潜在的なつながりとその充実感を感じる場合である。

④の没我は、①と同じく正確には②↔③の極ではなく、特殊な場合であり、成熟した愛にみられるような没我性である。未成熟な自己喪失体験や病理としての離人体験も、自分が図化されていないという意味ではこれに近いとも思われるが、離人症の自己喪失では、他者も実感的に見えていないので、④は本来成熟域の段階だと考えなければならない。つまり内面が充実してのみ、他者をありのままに認知することができ、そこに没我することができると考えられる。前述の「非ユークリッド的」理論にしたがえば、没我的共感においては、相手のみがありのままに感じられる。前述した図1におけるように相手への共感と相

手の自己認知の差は、普遍的ノエシスが相手自身を通じて働くかわりに、自分を通じて働くにすぎないような典型となる。普遍的な力(x)が自分を通して働いているかのように表現されるゆえんである。(x及び点線を仮定しない「ユークリッド的」常識と対比される。)行動レベルでも、相手を主体としてとらえ、純粋にその相手を援助している関係が没我的だといえる。なお没我は基本的には相互性を要求せず、一方的に相手中心になりうるような関係である。

㉑の一体化は、㉑↔㉒線上の共同性の極である。没我とちがって相互性を要求し、その一体感に情緒的・態度的・存在的意味を見出す。相手のノエマ自己と同一化または融合し、共同のノエシスが体験される。内面が充実したときの一体化 $f \oplus$ は、つながりの極としての自他の融合である。この場合には共同の枠も必要とせず、融合体は第三者や外界に向かって開かれている。また深いつながりの実感に支えられ、たとえ離れたとしてもつながりの感じが保てるような安定した一体感をもった関係といえる。これに対して一体化の病理は共生関係である(実際の共生関係は相互的でなく、一方的であるが、それは図式では問うていない)。離人体験も実際には主としてここに含まれ、実際問題として共生精神障害者が離人体験をもつことは多い。幼児の一方的依存も基本的には同じ原理によっているとみることができる。通常の世界関係においては、個人的自己の核も枠も貧乏なままに、また深いつながりや信頼もないままに、共同の枠に依存している状態が $f \ominus$ である。

いっしょにいることにしがみついている、相手がいないと自分がなくなってしまうというニュアンスが多くみられる。このような $f \ominus$ と極致的 $f \oplus$ との中間に通常の友情・恋愛・仲間集団におけるような一体化がある。すなわち若干の閉鎖性をもちつつもある程度内面に裏づけられた一体化体験があり、時によって $f \oplus$ 、 $f \ominus$ へとゆれ動くともなされる。

以上、㉑↔㉒の両極と、特殊な極としての

㉑、㉒を述べたので、その他の中間段階はほぼ機械的に規定して述べていきたい。㉑の段階の㉑、㉒、㉓についていえば、通常の個的存在感も共同存在感もあり、㉓の方にいくにつれて共同自己の枠とまとまりが、個の枠とまとまりにとってかわっていくことになる。

㉓の一体的連帯は、基本的には㉑の一体化と次に述べる㉒の連帯との中間段階として規定される。存在感としては、一体化よりは自他が分化・分離しているが、共同存在の系として認知される。自他の相違はあたかも個人の内部分裂(極端には二重人格)と同様にとらえられ、したがって2つのSub-systemの統合として共同の系がとらえられる。

㉒の連帯は、個人的自己と共同自己が共にほぼ平等に成立しうる状態であるが、現実社会においては個人的自己が優先し、共同自己は存在感としては従的に体験される。共感や協同行動においても、お互いの独立性、相違性を前提とした上で、しかし情緒的・深層の必然をある程度伴った共同性が発揮される。親密な人間関係のもっとも普通のタイプと規定される。とくに㉒ \oplus は、普通の親しい関係で、お互いにある程度独立で利害・役割関係に支えられ、深いところでもある程度のつながりと尊重を伴う場合である。

㉑の孤立的連帯は、㉒の連帯と㉑の孤立との中間段階である。ある程度、情緒的交わりがあるが、基本的には孤立的個人的自己が、契約・役割等によって社会的に結びついているという形態である。ここでは、主体の感覚はほとんど個のみ源泉をもつことになり、共同存在感はごく希薄である。

以上のように、横軸の各段階ごとに未成熟な㉑段階から㉑の成熟した段階すなわち存在の実感と充実感をもった他者をも実感的に主体として尊重した状態へという段階が設定されるわけで、そのさらに具体的な姿は次項の表3・4・5の例示をへて第2論文に譲ることとする。

6. 実証研究に向けて

以上の主旨に基づき、表2を基礎にして実証研究向けの諸尺度が構成される。すでに各種のものが我々の間で試みられているが、ここではそのいくつかを例示する余裕しかない。

まず、以前の研究における左上から右下へ（未成熟な孤立から成熟した共同性へ）の尺度は、やはりかなり多く用いられ、洗練されてきている。表1及び第2論文で用いる質問項目のいくつかは、成熟価値（内的つながり）に無関係の個（孤）↔共同のヨコ軸に関するものであるが、多くはやはり価値的に左上から右下への尺度というニュアンスをもっている。

これに対して、上記と逆に右上から左下（未成熟な共同性から成熟した孤立、独立性へ）という軸も当然考えられる。それはたとえば幼児の共生的依存から青年期の（孤独のニュアンスを伴った）独立へという成熟への段階あるいは共生的・依存的病者の治療過程に対応するようなものである。この面の研究は、まだ行なわれていないが、上との対照上、独立自我の実感形成過程を例示すると表3のようになる。

〔表 3〕

Ⓕ	相手に依存しきった共生関係、独立した自分はない。
Ⓖ	独立した自分も若干あるが、相手とのまとまりの方が強い。
Ⓖ	それぞれ独立して存在しながら、同時に心がつながり合っている。
Ⓒ	それぞれの独立した自己実現の方が強調されている。
Ⓑ	完全に独立して存在し、それぞれが自由に自己実現している。

これは第2論文で述べる「共同のまとまり」に関する左上から右下への項目（Q6）と対をなすものであり、双方の項目を交差させれば、後の表4、5と同様の2次元尺度の例になる。表4、5の形式でいえば、上記がf⊖、d⊕、b⊕をあらわす項目になり、表1ないし次論文Q6からb⊖、d⊕、f⊕が拾いうる。ちなみに表2、3と同様にして残りの欄を埋めると表3付表のようになる。

〔表3付表〕

b⊕	若干の不安・不満・防衛を含んだ通常の独立
f⊕	依存も愛も含んだ通常の一体感
d⊖	つながりへの依存と防衛的独立の間をゆれる
d⊕	独立とつながりがともに深く充実している。

以上のように、総合的には、文章化ないし図式化された2次元尺度が存在的・情緒的・態度的諸次元について作成される。表1の各項目についても原則的にはそれぞれ2次元的尺度が成立するわけであるが、ここでは紙数の関係上、存在感の次元に関するもの（表4）、共感・協同行動に関するもの（表5）を例示するにとどめる。表4は、個的存在感の極から共同存在感の極までをヨコ軸にとり、図と地の関係であらわし、一方タテ軸の成長の軸を、存在の実感とその尊重という点からとらえたものである。ここでは個的存在感においても、共同存在感においても、ともに実感のうすい⊖段階から、存在の実感・充実・尊重という⊕段階への移行が平等にあらわされている。（ヨコ軸は第2論文Q9とほぼ同じ）。

〔注〕、表は、ごく概念的に記しただけであるが、離人症、二重人格、宗教的融合体験のように、存在感の態様が明らかな場合は別として、日常レベルで自己の存在感を判定評価することは本人にとっても容易ではなく、評定尺度化も言語表現の壁につきあたる。たとえば表のf⊕では「相手が存在することは自分が存在することと同じ」というニュアンスを持ち、しかも自他の存在が大切にされる。これは第2論文Q2-f「自分が死んでも相手の中に生き続けることが実感できる」、Q2-g「相手が生き続ける事実だけで、自分には十分である。」というニュアンスにも通じるものである。しかし「相手の存在は自分の存在と同じように大事である」という言葉にしてみると、それは存在感としてではなく、いわゆるヒューマニティとしての平等の大切さを意味するにすぎなくなってしまう。デリケートな掘索が必要なゆえんであるが、これに対して前起の病理や特殊体験の例示は分りやす

く、たとえばf⊖の「未分化な共生」のように、幼児の未分化や共生精神障害の例からして比較的一義的に共通理解に達しうる道の探索も、尺度作製、ひいては研究全体にとって不可欠であろう。

表5で共感については（その内容の正確さは問わないこととして「姿勢」に目を向け）ヨコ軸に、⑥個の孤立性と共感の限界の認識に立った相互理解と尊重→④自分とは独立の相手への共感的理解→①自体一体化したような（あたかも同じように感じ、内的に触れ合うようなピッタリした）共感をとっている。タテ軸は、相手をありのままに主体として深く感じとり大事にする度合である。タテ軸の⊖には、共感の貧困や拒否、自分の都合によってしかわかろうとしないという面が強調される。同様に、協同行動については、ヨコ軸に、考えや目標が違うか同じかということが問われ、タテ軸に協力性、相手尊重の度合が問われることになる。

なお、表2の場合と同様に③は基本的には⊖、⑧は⊕のみしか該当しないので表記はしなかった。ちなみに④は、自分以外がみえていないという共感・協同行動以前の状態、⑧は、ただ相手の心だけがありがたみを感じられる（自分を無にして相手のために行動する）ということになる。

これらスケールの実際の使用に当っては、第2論文におけるように、今のところ図式スケールのみを二次元化し、あとは目的に応じて左上から右下、右上から左下、価値を含まないヨコ軸等々に一次元化した質問紙を用いることが多いが、表4,5のように、文章を簡素化した二次元尺度を用いることもあり、とくに研究者の評定尺度として多く用いている。

総じてこの尺度は、内的状態（パーソナリティ）と密接な関係はあるが、実証研究においては、基本的には関係性、それも瞬間の状態について用いることの方が有効であり、したがって成熟した人でもマイナスの場合が

表4 存在感（白紙部分は省略）

存在の形態 存在の充実感	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
	同 右 (地にも 共同存在 在なし)	自己とは個人的 存在 (地に共同存在)	同 左 共同存在感 も少しある。 (いくらか図化)	個人的存在中心 共同存在感もある。 (かなり図化)	自他を含んだ 系が自己 (共存の方が図)	合一した共同存在 (個は地のみ)	相手の方が より「自己」 (自分自身 は地のみ)
⊖		他者がみえず、 自分中心、その 存在感も稀薄		個も共同存在 感も同じくら い弱い。		未分化な 共生	
⊕							
⊕		もっぱら個とし ての存在感。 (西欧的極)		個でありながら 共同感もある。 ふつうの存在感。		自他未分化を 残しつつの分 化統合 (日本的極)	
⊕							
⊕+		個的存在として の充実。 他者の個を尊重		個も共同存在 感も同じくら い充実。		分化した上で 再結合一体化	

あり、個人的な人でも⑥, ⑧段階のことがあることを大前提としている。

ここで本論が、とくに理論的体系的尺度化の方に力点を置いていることを付記しておきたい。われわれは基本的にはある切断をしたときの自己の特性を理論的、一義的に設定し、まさに理論にもとづいた自己・関係像の位置づけを目的としてきた。つまり表1～5（および紙面の都合で省略したこれと同様の諸尺度）はすべて基本的には理論に精通した研究者が用いる評定規準としての性格のものであり、それぞれの項目に関する詳しい解説、評

定例の集積にたつて、研究者の間でイメージの一致、評定規準の一致をはかってきたものである。この意味で単独に質問紙項目にするには不適切な面もあるが、しかし表1を質問紙化した上杉・神田らの前述の結果からして、質問紙として用いることも（一定の限界を踏まえた上で）可能である。第2論文ではこの意味で質問紙化を行なうが、しかし同時に用いた表2のタテ軸が、本人評定のスケールとしては必ずしも適切でないことが明らかにされ、むしろ研究者評定として使用することになるわけである。

表5 共感・協同行動に関するスケール

形態 成熟度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑧
	(略)	孤立性の認識、共感・協同行動の限界の認識に立つ。	(中間)	自分とは独立の相手への共感的理解と協力	(中間)	自他一体化したように同じように感じ合ひ、行動する。	(略)
⊖自己中心 共感不能・拒否 (共同行動不能)		自他の断絶 共感なし (協同行動なし)		頭だけでわかるか、双方が一致した面でのみわかる。 (利害の一致・共存・ 単なる服従的協力等)		同感し身につまされて、巻き込まれる。 (相手のいいなりの) (非主体的協力)	
⊕ふつうに自己中心と他者中心		ある程度・断絶しながら独立性の尊重もある。 (義務、役割として協力)		自分とは独立の相手への、ある程度実感を伴った普通の共感。 (目標・考えが違いながらの普通の協力)		同感して共に揺れながらも相手がみえている。 (ある程度、主体的で) (一心同体)	
⊕ありのままの共感と他者中心		孤独・独立性をふまえ、限界をわきまえた共感的理解と自由尊重 (責任としての協力)		同上、愛他性の強い場合 (同)		ありのままの相手の気持ちが入り込んでくる。 (協力、即、自分の喜び) (一心同体で協力)	

7. 要約と問題点

以上、我々は過去のいくつかの研究の継続として個人的自己だけが存在感や情緒的・態度的自己同一性の原点ではなく、個人的相から共同的な相に至るまでのすべてが自己構造として可能であること、また内的成熟や主体的交わりもそれぞれの相において可能であることをみてきた。また、新しい実証研究に向けてのスキーマとその尺度化の具体例を述べてきた。しかし、存在感を中心としたデリケートな感覚は言語化が極めて困難であり、かつ人によっても、異なるというのが我々の体

験してきたところである。図式的表現においても、そのとらえ方、感じ方は多様であり、一義的にすべての人に通用する枠組みを設定することはほとんど不可能に近い。1次元的尺度から2次元的尺度へと研究を発展させたことにより、研究上のいくつかの困難が解決されたとはいえ、言語的にも図式的にも整合性に関する新たな問題が生じている。

さらに我々は存在感の次元と情緒的・態度的次元とをできるだけ分化させた上で総合的にみることをねらいとしてきたが、実際に両者の分化が容易でないという問題も残されて

いる。いくつか例示してきた項目（さらには第2論文で質問紙の形で掲載される項目）において、存在感の次元と情緒的・態度的次元との区別は必ずしも明確ではない。

表4にみるように、存在感を典型的に表現すれば、個人的極では「自己とは個人的存在だけである」ということになり、それに対して共同存在の極では「自他を含んだ共同の系ないし「自分も相手もない合一した共同存在が真の自己」だということになる。さらに没我的には「相手の方がより自己」だということになる。（第2論文Q9）

これに対して情緒的・態度的には、表5にみるように共感や協同行動の程度（表1および第2論文Q4、Q5）などが代表的である。しかし、相手の幸福を自分のことのように喜べるか（同Q1）、相手の存在が自分の死（消滅）をも代償させるか（同Q2）、相手が自分と同じ位大事か（同Q3）というような価値の基本になる感覚は、現象的には情緒的・態度的次元に属しながら、存在感と不可分の関係にあるとみなければならない。本論の代表的な表2も、双方の次元を含んだものになっている。実際問題として一般の研究において、存在感に関する叙述は、多くが情緒的・態度的なニュアンスを含んでなされている（同Q6、Q7）。

古今の自己に関する諸理論が極めて多様な「自己」の概念規定やイメージを発展させているように、存在の問題を含んだ「自己」の人間学的探求は容易に体系化・測定になじま

ないものであり、あえて簡易に体系化すれば多くのニュアンスを犠牲にせざるをえないであろう。このジレンマを認識しつつ、しかしおおよその構造原理を明らかにするためのものとして、前著の「非ユークリッド的」公準の体系化も、また過去の諸測定研究も位置づけられる。今回2次元尺度を設定したのも、もちろんとりあえずの研究準拠枠にすぎず、より現象学的に個々の体験の了解と合わせながら、研究を進めていかなければならないものである。このことは次の第2論文の方法にも生かされることになる。

文 献

1. 水島恵一 1978 人間学、有斐閣
2. 水島恵一 1979 「体験と意識」研究の方法論、体験と意識に関する総合研究第1集
3. 水島・神田 1978 「非ユークリッド的」自己理論とその体験的検証。その1、日本心理学会第42回発表論文集
4. 水島・神田・棚倉・土沼 1979 「非ユークリッド的」自己理論とその体験的検証。その2～5、日本心理学会第43回発表論文集
5. 上杉 喬 1978 集団の創造的動に関する一考察、日本心理学会第42回大会発表論文集
6. 神田久男 1980 場面状況における対人認知構造の変容過程、体験と意識に関する総合研究第2集

